

「子どもが貪られる」?

——フロイトの症例「狼男」再訪——

石 崎 美 侑

京都大学大学院 人間・環境学研究科 人間・環境学専攻

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 精神分析史上最も有名な患者のひとりであるフロイトの症例「狼男」は、フロイトとの分析終結後、鼻に関する奇妙な固定観念に悩まされ、女性分析家ルース・マック・ブランスウィックの分析を受けている。この時には「心気症型のパラノイア」と診断されているが、鼻に関する症状には明らかに家族内の女性への同一化が認められる。本論では、フロイトとブランスウィックのパラノイア理論を整理するとともに、狼男の「心気症型のパラノイア」と彼が子どもの時に体験した小指が切れた幻覚について、ラカンの読解を参照しつつ、狼男における去勢や父性と言った問題の両義性から再解釈を試みた。

キーワード：症例「狼男」、ラカン、パラノイア、同一化、父性

I. は じ め に：
症例「狼男」をどのように読むか

フロイトが 1918 年に発表した「ある幼児期神経症の病歴より」は、ロシア貴族の裕福な家庭に生まれた男性セルゲイ・パンケイエフという患者の症例である。「狼男」という仮名は、彼が幼少期に見た夢にちなんで名づけられた。

そもそもこのロシア人男性がフロイトのもとを訪れるまでの経緯を整理すると、彼は抑うつが原因でミュンヘンのサナトリウムに入院していた（狼男はクレベリンの診察も受けていた）。このサナトリウムからはすぐに退院したが、父の死や、狼男を虜にしていた看護師のテレゼとの関係などで彼の気分は安定せず、生活状況は二転三転していた。その後、母親がコンタクトをとった医師の息子（「オデッサで唯一フロイトと精神分析という存在を知る人物」¹⁾）の往診を受けるようになり、この人物との旅行中に、ついにフロイトの診察を受けることになる。フロイトの診断では、

来談当時の狼男は「自動的に経過して治癒に欠陥を残した強迫神経症の後続状態」（GW12, 30）²⁾ にあり、つまり、子ども時代の主たる症状であったはずの強迫神経症がその後も影響を及ぼしつづけていると考えられていたのである。

フロイトが狼男の分析を行ったのは 1910 年から 1914 年にかけてのことであるが、狼男の分析は停滞が多く、フロイトは後に終結の期限を設定するという措置をとることにより進展を図った³⁾。

狼男は精神分析史上最もよく知られた症例のひとつであり、その家族歴や人格形成、症状や診断のみならず、フロイトの分析技法やいわゆる「原光景」〔＝両親の性交の場面〕のもつ意義など様々な観点から論じる余地があるが、私たちが今回注目するのは、狼男の病歴における女性の系譜である。狼男の幼少期の回想には、両親と姉だけでなく、乳母や家庭教師、女中などが登場し、それぞれ印象的な思い出を残している。特に、姉からの誘惑や母親の心気症的なエピソード、乳母や子守による去勢の威嚇は、狼男の病歴に看過することのできない影響を与えている。例えば、ブル

ム（1974）は狼男の幼児期における母子密着状態に注目し、狼男は「幼児精神病のエピソードを伴う境界状態」にあったとみなしている。この研究を皮切りに、狼男を境界例と診断しなおす研究がいくつか発表されている⁴⁾。

本論では、狼男の病態水準についての判断は行わないが、去勢と病態水準の関係を精神分析的に論じるならば、必然的にラカン派の存在論的構造の問題に行き当たることになる。したがって、この点に関しては、ミレール（2009a, 2009b）の講義録を参照しつつ検討する。ところで、先述のブルムの考察は、狼男の青年期の妄想状態における、同じく長らく心気症状態にあった母親への同一化に目配りしている点で本論と問題意識を共有していると思われる。私たちはさらに、主に1950年代のラカンの議論、つまり、母子の想像的な二者関係に介入する父性機能を強調した議論から考察を進めたい。

狼男に関する資料の発表は60年以上の年月をまたいでおり、フロイトによる症例の発表以降にも、分析を引き継いだルース・マック・ブランスウィックによる「補遺」や、ミュリエル・ガーディナーが編纂した『狼男による狼男』が刊行された。『狼男による狼男』には、狼男による自伝（「回想録」）だけでなく、ブランスウィックによる先の症例報告、ガーディナーによる「診断的印象」なども収録されており、大変充実した内容となっている。その他にも、フロイト・アルヒーフには管理人であったクルト・アイズラーが行った狼男へのインタビュー音声保管されており、これらの資料を併せると、狼男のその後の人生について包括的で網羅的な見取り図を得ることができる。

狼男のその後に関心を示したのは精神分析コミュニティの人間のみにとどまることはなかった。カリン・オブホルツァーは、狼男の最晩年にインタビューを行い、その成果を『W氏との対話』というタイトルで出版した。ジャーナリスト出身の彼女は、後継の分析家たちのフロイト崇拝的な雰囲気とは距離を置き、狼男と個人的な信頼関係を構築しながらその晩年を丹念に追って記録している。それでもやはり、精神分析を学ぶものに

としては、狼男が分析を通じて、はたして健康的で幸福なふつうの人生を送ることができるようになったのかという興味をかきたてられるものとなっている。

Ⅱ. 狼男の「心気症型のパラノイア」

（i）フロイトとの分析終結後の狼男

冒頭でもふれたように、症例狼男といえは、かの有名な狼の夢の解釈を想起する人が多いだろう。狼男がフロイトとの分析を開始したのは1910年1月だが、フロイトは、狼男の様々な子ども時代の素材——動物恐怖（の夢）、宗教儀礼的な強迫神経症、摂食や排泄にまつわる神経症的な症状——などを手がかりに、フロイトのもとを訪れるよりはるか昔の狼男の病歴を再構成した。この症例論文の目的は、両親の性交の場面を意味する「原光景」がもつ外傷的效果を、臨床的に実証することに捧げられているといっても過言ではない。ジェイムズ・ストレイチーは、この症例報告が収録された英語の『標準版（The Standard Edition）』の序文で「最も精緻でおそらく最も重要な」論文であると賞賛しており、当時既に袂を分かっていたユングやアドラーとの論争に決着をつけ、もはや小児性欲の存在を疑いのないものにする証左であったと考えているようである⁵⁾。

他方で、フロイトが再構成した狼男の病歴に比べて、1926年から1927年にかけて行われたブランスウィックとの分析の経過が取り上げられる機会にはるかに少ない。1914年に治療を終えた狼男に、その後、一体何が起こったのだろうか。彼がブランスウィックの分析を受けるまでの経緯と、分析の経過を見てみよう。

オーストリア大公フランツ・フェルディナントとその妻が暗殺された1914年6月28日（サラエボ事件）に分析は終結され、狼男はそのすぐ後でテレゼと結婚した。1919年には、便秘症の治療のため数カ月にわたってフロイトと再び分析を実施している。この時の狼男は、ロシア革命によってほとんどすべての財産を失っていたため、分析は無料だったうえに狼男夫妻の生活のため6年に及ぶ募金活動まで行われた。

1923年の夏、狼男がお金を受け取るためにフロイトのもとを訪れた際に、再び運命の歯車が動き始める。同年の4月、フロイトは口蓋部の手術を受けており、その姿を見て狼男はショックを受けた。フロイトは二度目の手術の後で、自身を蝕む病について狼男を含む関係者たちに告げたのだった。

(ii) ブランスウィックとの分析

ブランスウィックの分析を受けるに至るまでの病歴は、1923年11月にまで遡られる。狼男は、ロシアからやってきた母親を車で出迎えた際に、彼女の鼻に黒いイボを見つけた。鼻に関する奇妙な考えが芽生えたのは、1924年2月のことである。狼男はフロイトとの分析中に、X教授から鼻の皮脂腺閉塞症に対する処置を受けていた。

自分の鼻に対する狼男の観念は両価的である。子どもの頃には鼻が小さく上向きだったために「パグ犬」とからかわれ、思春期には鼻カタルのせいで鼻と唇がヒリヒリと痛むなど、鼻はいつも悩みの種だった。他方で、ウィーンに来てからは、(ブランスウィックはユダヤ人の鼻と比較したからだと推察しているが)むしろ自分の鼻を誇らしく思うようになり、「欠点のない鼻をしていることはなんとという幸運だろう!」とまで考えていた。

5月に母親がロシアへと帰国した2週間後、狼男は自分の鼻の真ん中あたりに小さなニキビを見つけた。狼男の鼻のニキビは、ちょうど母親の鼻にできた黒いイボと同じく出たり消えたりを繰り返した。健康保険組合の皮膚科医に診察してもらったところ、医師ははじめ自然に治るだろうと見立てたが、2週間後の再診の際には否定的な返事をした。打ちひしがれる狼男に対し、医師は追い打ちをかけるように「できることは何もない」と言い放った。

狼男はその足でX教授のもとへ赴いた。教授は、簡単に処置できると言って鼻の化膿している箇所を器具で強く押した。その際に血が流れたが、分析中の狼男によれば、彼は教授の手から血が流れるのを見てエクスタシーを感じたという。最終的には1925年の夏に電気分解手術を受け、この手術によって鼻に傷ができてしまった。狼男はこ

の傷によって自分の容姿が著しく損なわれたと感じ、妻の手鏡を借りてはしきりに自分の鼻を観察するようになった。手鏡を覗き込む頻度や彼の必死さは、周囲の人に狂人という印象を与えるほどのものだった。1926年の夏に、他の皮膚科医によってこの傷はもうどうしようもなく、鼻に関する固定観念の方をなんとかするよう諭されたところで、彼の不安は最高潮に達する。

こうして、1926年10月に、フロイトの紹介でブランスウィックとの分析を開始した。ブランスウィックの見立てでは、狼男とフロイトの間には、未解決の転移の問題が残っていた。手術後のフロイトの容貌にショックを受け、同情心から同性愛感情が高まったと考えられる。狼男の診断を「心気症型のパラノイア (the hypochondriacal type of paranoia)」とするブランスウィックの考察は、同性愛感情の抑圧と投影によってパラノイアを説明するフロイトの理論に立脚している。

ブランスウィックとの分析中に、狼男はいくつかの夢を報告しているが、それらの夢は、フロイトをはじめとする彼にとって父性的な人物への非難を告発するものであった。陰性のエディプスコンプレックスを自覚することで、狼男ははじめて妄想から脱することができたのである。容姿が損なわれたというのは彼の思い込みであるという自覚が生まれたことで妄想は消失した。その後の狼男は芸術や知的な活動への関心を取り戻し、人格も発症前と遜色ない安定した経過をとった。私たちは、この「心気症型のパラノイア」を、フロイトとの分析において表面化することのなかった父へのアンビバレントな感情の残滓であり、「自動的に経過して治癒に欠陥を残した心的葛藤の後続状態」と呼べるかもしれない。いずれにせよ、これが狼男の「心気症型のパラノイア」の顛末である。

Ⅲ. 女性への同一化

狼男の症状形成において、近親者との同一化という要素を見逃すことはできない⁶⁾。フロイトは「ある幼児期神経症の病歴より」のⅦ章で母親との同一化について論じている。子ども時代の狼男は、それぞれ赤痢と失禁に関する不安に襲われ

たことがあった。自分が赤痢で死ぬのではないかという不安は、赤痢では便に血が混じると聞いていたことから、母親の下腹部の疾患による出血と結びついたのではないかと考えられる (GW12, 108-109)。失禁の方は4歳半の時のことだが、身体を洗ってもらっている間に、彼は恥のあまり「こんなんではもう生きてられない (So kann ich nicht mehr leben)」と感じていた。これは、母親が例の疾患の往診の後で独り言ちたのと同じ言葉であった。フロイトの説明では、原光景の目撃の時点では、解剖学的性差に対する理解の未熟さから、幼い狼男は女性が性交において排泄孔 [= 腸の出口] を用いると考えるしかなかった。その後、去勢という観念が生じてからも、彼は去勢に対する不安から旧来の「排泄孔理論」にしがみついたのだった (GW12, 110-111)。

ここからは、狼男にとって決定的な女性たち——姉と母親への同一化について見ていこう。

(i) 姉アンナ

子ども時代の姉アンナは利発さと腕白さを兼ね備えており、大人しい性分だった狼男と比べて周囲からは「お姉さんが男の子だったらよかったのに」と言われていた⁷⁾。また、彼女は性的にもかなり早熟で、狼男が3歳3カ月の時に、姉から弟への誘惑の場面があったとされている (GW12, 43)。

思春期に入ると、子ども時代の活発さとは打って変わって物静かな女性へと成長したが、相変わらず知的能力においては周囲を圧倒するほどであり、詩作のような芸術的センスにも恵まれていた (GW12, 44-45)。彼女の才気煥発を父親が高く評価し鼻息したことは、狼男に強い劣等感を与えたようである。狼男は、身分が低く教養のない女性にばかり魅かれることを、「姉コンプレクス (Schwesterkomplex)」によるものだと解している。

しかしながら、20歳を過ぎたあたりからアンナは容姿をひどく気に病むようになり、次第に人付き合い全般から撤退し、1906年に水銀中毒で亡くなった。姉の死後の狼男の様子については、矛盾する二つの報告が残されている。フロイトによれば、狼男は相続をめぐる競争相手がいないく

なったことに喜びを感じていたという。他方で、自伝から分かるように、実際の狼男は深い抑うつ状態にいた⁸⁾。狼男は当時オデッサ大学の法学部に在籍していたが、1907年に専攻を哲学へと変更している。哲学は元来アンナの領分であった。

狼男の鼻への異様な関心は、姉との思い出にも起源をもっていると考えられる。アンナはかつて、自分の鼻が赤いせいで醜く見えることの恐れを口にしていた。二人は、「いかあなは？」(「はなあかい (鼻赤い)」)の反対言葉」という秘密の合言葉で、姉の鼻が醜くないか確認し合っていた⁹⁾。狼男は姉の鼻が醜いと思ったことはなかった。

大胆な仮説ではあるが、アーブラハムとトローク (1976) は、狼男がごく幼い時分に姉を〈体内化〉し、狼男の自我はこの体内化された姉を核に編成されたのではないかと考えている。アンナの性的早熟は、彼女自身がかつて受けた性的外傷に由来するものであり、姉から弟への誘惑の場面は、姉が父から受けた誘惑の場面の反復であるというのである。ここでアーブラハムとトロークの論証を繰り返すようなことはしないが、狼男が話す複数の言語において響いている音韻は、体内化された姉による告発の残響であるという非常にスリリングな謎解きが展開されており、姉との同一化を説明する根拠として無視できるものではない。

(ii) 母親

既に確認したように、狼男の腸の症状は母親との同一化によって理解される。そして、極めつけが、彼を「心気症型のパラノイア」に至らしめた鼻のニキビである。狼男の鼻のニキビは、ちょうど彼が母親の鼻の上に発見した黒いイボと同じように、現れたり消えたりしていた。狼男が皮膚科医に相談したところ、その医師「どうしようもない」という否定的な見解を述べたため、出血の際の母親の絶望感を言い表したあの言葉——「こんなんではもう生きてられない」——を狼男は繰り返したのである。

狼男の回想からは、彼の母親が、息子を支配するいわゆる「ファリック・マザー (ファルスをもった万能の母親)」のような存在あったことをうかがわせるエピソードが多数得られる (これら

については、「狼男と父の遺産」と題した項で詳述する)。狼男の母親は、自分の心気症のために子どもへの関心をもっていなかったとも、病気の時にだけは熱心に看病していたとも言われているが、女性関係にはかなり嫉妬深い性質だったようである。

ところで、『狼男による狼男』に掲載された図版の中で、なぜ母親だけが少女時代の写真なのだろう? 彼はトルーマン・カポーティ風のホモセクシュアル——妖婦と少女に分裂させられた母親像の持ち主たち——のひとりだったのだろうか? もっとも、狼男自身は「無意識では誰もが同性愛的潮流をもつ」という極めて精神的分析的な見解を採用しつつも、自身が同性愛者である可能性については否定している。子どもは誰しも母親の欲望の対象であろうとする時期を通り抜けるものだが、子どもにとって最も耐えがたいのもまた、おそらく、単なる対象の位置へと貶められてしまうことなのかもしれない。

IV. 貪食の不安: フロイト=ブランスウィックの パラノイア理論

ここまでは狼男というひとりの男性患者の症例について検討してきたが、ここからは彼が経験した一過性の妄想状態、つまりパラノイアそのものの探究へと進みたい。しかしながら、「パラノイア問題 (Paranoiafrage)」という通称で知られているように、人格の崩れの目立たない(つまり、統合失調症ではない)妄想という問題圏は複雑かつ広範で、一般化可能な仮説を提示することは困難である。そのため、ここからは、フロイト理論におけるパラノイア概念に的を絞り、狼男の分析にも携わったブランスウィックによる妄想の分析や、さらにそれらと非常に近似していると考えられるラカンの理論を中心に据えて考察していこう。

パラノイアの機制について、フロイトが草稿 H (1895 年 1 月 24 日付のフリース宛書簡の付録) で既に構想をもっていたことが確認できるが、最も知られている理論——しかも、その理論は後

継の分析家たちが同性愛を治療すべき病理とみなすに至る誤解を生んだことでも名高いが——は、1911 年に発表された「シュレーバー分析」のものだろう。シュレーバーにおいては、実父やフレクシヒ教授のような父性的な人物との間には、「尊敬の念に満ちた服従心と敵愾心に満ちた反抗が一体となったもの」(GW8, 287) であるアンビバレントな感情があった。しかしながら、このうち陽性の感情、つまり性愛的な強度にまで高められた思慕は、父や年長の兄弟から主治医へと転移されるとともに、同性愛への拒絶感から抑圧を被ることになる。妄想患者は、自らの内面に存在する「(男である) 私は彼を愛している」という命題を受け入れる代わりに、それに対する異議申し立てとして様々な水準での加工を行うことになる。例えば、述部が変換されると「私は彼を憎む」ようになり、これが他者に投影され主客が逆転すると「彼が私を憎む」という被害妄想の基礎が完成する。主語や目的語、述語といった文の成分の入れ替えと、投影のメカニズムによって、被愛妄想や嫉妬妄想といった様々な妄想の形成過程を整理することができる¹⁰⁾。これがよく知られたフロイトによる妄想の文法である。

「シュレーバー分析」におけるフロイトは、神経症の場合と同様に精神病においても「父コンプレクス (Vaterkomplex)」を重視していたが、1915 年にひとつの転回が起こる。本論の要石はここにある。「精神分析理論にそぐわないパラノイアの一例の報告」(1915) の中で(そのタイトルにもかかわらず、フロイトはあくまでもパラノイア=同性愛抑圧の理論を棄てようとはしないが)、パラノイアの素因は母親への同一化という退行的な対象愛にあるとされる。さらに「女性の性について」(1931) の中では、フロイトは特に女性のパラノイアについて、その原因は「母親に殺される(貪り食われてしまう?)」のではないかという、意外なようで、実はありふれた不安であるように思われる」(GW14, 519) と述べている。

ここでフロイトは、当時彼が教育分析を施し、お気に入りの弟子のひとりであったブランスウィックの症例報告を引用している¹¹⁾。この論文で紹介されたある女性のパラノイア患者は、ブラ

ンスウィックによって、その病因が姉への前エディプス的な固着にあると分析された。彼女は幼少期に姉から性的誘惑を受け、お互いの性器を触るよう仕向けられたが、叔母に見つかり厳しく叱られた後で、誘惑者である姉から公然と非難を受けるようになった。この出来事が、後の他者への非難を形づくったと考えられる。また、姉への強い同性愛的固着が彼女の正常なエディプス期への移行を妨げており、ブランスウィックは、「父親は彼女に対して何の役割も果たしていない (der Vater spielt bei ihr keine Rolle)」という印象を受けていた¹²⁾。この論文はドイツ語で書かれ、「ある嫉妬妄想の分析」というタイトルが付けられたが、同じく 1928 年には英語で書かれた狼男についての「補遺」が出版されている。

ここに、精神分析的なパラノイアの理解に、「父コンプレクス」とは別の——狼男が敢行した「女性への突破 (der Durchbruch zum Weib)」ならぬ——女性からの突破を見ることができないかもしれない。フロイトは、「母親に殺される (あるいは貪り食われる)」という不安がパラノイアの病因となる、という理論を専ら女性のものとして記述しているように読めるが、果たしてこのような現象は、ただ母—娘関係のみに限定することができるだろうか。「女性への同一化」の節で確認したように、狼男には自らが後に「姉コンプレクス」と名づけたような、女性への強い固着と同一化がある。また、姉からの誘惑は、彼を人生のごく早期に性的受動性の立場に置いていた。

V. On dévore un enfant?

1920 年代にブランスウィックが先鞭をつけていた問題——つまり、パラノイアの発症までには前エディプス的な対象関係への固着とそこに対する父親の不介入があるのではないかという仮説を、より構造論的に整理したのが、ラカンの 1950 年代の一連のセミナーではないだろうか。

セミナーⅣ巻『対象関係』で、ラカンはいくつかの恐怖症の症例を紹介している。取り上げられているのは主に症例「ハンス」をはじめとする子どもの症例であるが、このことにはそれなりの

理由がある。というのも、当時のラカンの主眼は、メラニー・クラインをはじめとする、前エディプス期を重視する理論 (対象関係論) を批判することにあつたためである。ラカンによる症例「ハンス」の読解についてはここでは深く立ち入らないが、ハンスの馬恐怖を父親からの去勢の脅威と解釈したフロイトに反して、ラカンは、母親との二者関係に置かれていた幼い男の子が、いかにして密着状態を解消する (第三項としての) 象徴的父の位置を確保するかという、父性機能の介入を重視した理論へと発展させている。

子どもの恐怖症がもつ発達上の役割が示されるなかで、ひときわ異彩を放っているのが、1956 年 12 月 19 日にとりあげられた、女性分析家リュート・ルボヴィッチによる症例「イヴ」である。これは 20 代の男性の症例であり、はじめ恐怖症として診断されたが、分析の経過中に窃視症を形成した。症例報告の論文は「精神分析治療中に生じた一過性の性倒錯」というタイトルで『ベルギー精神分析家協会活動報告』に掲載されたものである。ほとんど知られていない症例なので、まずは病歴と治療の経過を確認しよう。

(i) 症例「イヴ」の病歴

症例「イヴ」と名づけられたこの患者は、「自分の背が高すぎてばかばかしく見えるのではないか」という奇妙な強迫観念に取りつかれていた。職業は商船の操縦士であったが、この重度の強迫観念のために仕事をはじめとするあらゆる活動が困難になっていた。ルボヴィッチは彼を恐怖症と診断し、治療を開始した。

イヴはひとりっ子で、家庭では母親が実権を握っており、イヴが母親に「ファリック・マザー」のイメージを抱いていたことは想像に難くない。少年時代から内気で、異性とは話すこともなかった。分析が始まった頃には、母親が彼にあてがった 15 歳年上の愛人がいた。

イヴが分析の中で語った夢の中に、鎧を着た男が噴霧式殺虫剤を思わせるガスマスクのようなもので背後から彼を攻撃し、それによって彼が窒息させられそうになるというものがあった。このイメージは分析の中で繰り返し語られ、後に、この

鎧の男に対する恐怖はファリック・マザーへの恐怖であり、さらには転移内関係における分析家への恐怖であるという解釈を与えられることになる。

彼の窃視症的な空想が急速に進展したのは4年目のことである。この頃になるとイヴは一緒に住んでいる家族のことについて不満を述べるようになり、母親に支配されていると感じていた。はじめは、女性が放尿する様子を空想しながら映画館のトイレでマスターベーションをしていたが、そのすぐ後に実際に女性用トイレがのぞける場所を映画館内に発見した。

(ii) 「アファリック・マザー」¹³⁾ の構成

ルボヴィッチの言う「一過性の倒錯」が顕在化しはじめたのは、夢に登場する鎧の男とファリック・マザーを重ね合わせる解釈が伝えられ、また、転移関係の中で分析家がこのポジションを担いはじめてからのことである。ラカンもまたこの洞察は正しいと認めている。ファリック・マザーでなければ、この「鎧の男」はどのように理解されるべきなのだろう？ ラカンの恐怖症理解に従えば、「鎧の男」は欠けている父性機能の代理物、あるいは現実的父の代わりに現れる去勢の動作主とみなされるべきなのである¹⁴⁾。

本来ならば、フロイトがハンスを啓蒙した時のように、分析状況に象徴的な父を到来させることで万能な母親との窒息しそうな母子関係に出口を開くべきところで、ルボヴィッチはむしろ母子関係を強調するような解釈を押し付けてしまったのである。それに対してイヴは、トイレを覗き見る〔＝母親におけるファルス¹⁵⁾の不在を探す〕という方法で応答したのが、件の「一過性の性倒錯」の裏側である (S4, 91)。分析中に急激に発展する精神病的現象は、「想像界をそのまま認証し、象徴的な平面での再認の代わりに想像的平面での再認を用いることにある分析的関係の操作法」によるものである (S3, 24)。当時のルボヴィッチのスーパーヴァイザーはモーリス・ブーヴェであり、ラカンは、対象関係論が想像的な二者関係に終始し、異なる平面で自律的に作動している象徴的な機能に関して無知であることを批判しているのである¹⁵⁾。

ところで、この症例は、セミナーⅥ巻『欲望とその解釈』で再び取り上げられる。しかしながら、今度のラカンは恐怖症という診断を取り下げている。さらに、イヴには「妄想性の錯覚の下絵 (ébauches d'illusions paranoïdes)」 (S6, 567) があるというのである。この表現は、ラカンがセミナーⅢ巻『精神病』に収録されたセアンスで、狼男の小指が切れた幻覚について言及した際の表現——「パラノイア的な潜在性 (virtualités paranoïaques)」 (S3, 57) と響き合わないだろうか？

Ⅵ. 〈父性への期待＝父からの遺産〉

子どもは、母親の欲望のシニフィエを問うこと〔＝「母親は何を望むか？」〕を通して、欲望の対象としてのファルスを想像する。ハンスにおいて問題となっていたのは父性機能の欠如であり、つまり、ハンスの父親が優しすぎるあまりに現実的父として立ち現れないことにあった (S4, 212)。通常のエディプス¹⁶⁾的状况においては、〈父の名〉が導入され、母親の欲望は消去される。こうして、子どもは初めて母親の気まぐれな欲望への従属から解放されるのである。

子どもは時に、母親の欲望の中で自分自身の欲望を見失うことがある。自分は母親のファルス〔＝欲望の対象そのもの〕だろうかと問う子どもに対し、ラカンの父性はこれに敗北と承認をもって応える。つまり、子どもは母親をめぐる父親との闘いにおいて、そのペニスを父のペニスとの「比較 (Vergleichung)」に置かれ、「無化 (annulation)」されなくてはならず、ようやく「後に (plus tard)」十全な父性機能へと到達する (S4, 364)。こうして子どもは、母親のファルスそのものである (being) のではなく、父のようにファルスをもつ (having) ことを引き受けられるようになるのである。この将来性や承継という性格から、私たちは、エディプスコンプレックスの出口を〈父性への期待＝父からの遺産〉¹⁶⁾に見出すことにしよう。

(i) 狼男と父の遺産

狼男は旧暦 (ユリウス暦) 1886 年 12 月 24 日、

つまりクリスマス・イヴに生まれた。狼男は後に自身をキリストやシャルルマーニュと同一視することもあったが、彼がまた、自身を母親への贈り物と考えるに至ったことも想像に難くない。子どもが自らを親の欲望を充足させることのできる理想的な子どもであると考えるのはありふれた現象だが、こと狼男にとっては、その少々特別な出生からも、彼は常に親の欲望の対象であり、またそのようにあり続けること（ラカン派の言い回しを先取りするなら「ファルスへの同一化」）を自らも望んでいたにちがいない。狼男にはナーニヤという乳母がいたが、彼女は狼男を、自分の亡くなった子どもの代わりのようにかわいがっていた¹⁷⁾。「お母さんは坊ちゃんが末の子だからとてもかわいいのです」というナーニヤの何気ない言葉は、狼男に下の子が生まれることへの恐怖心を引き起こした（GW12, 114）。自分が最も愛された子であるか、——おそらく母親にとってだけではなく、父親やナーニヤたちにとっても——それが問題だった。

家族で父のいるサナトリウムを訪れた際、父親が姉にだけ大札紙幣を手渡すのを目撃して、彼女が泣くまで非難を浴びせかけたことがあった（GW12, 115）。子ども時代の狼男が姉に対する嫉妬心に目覚めたのはこの頃である。したがって、後の姉の死は、父親の遺産をめぐるライバルがいなくなるという歓迎すべき事態でもあった（GW12, 46-47）。姉の死から約2年後の1908年に、本当に父親が亡くなった。実際のところ、彼は唯一の相続人ではなく、遺産は母親との間で分けられた。狼男はしばしば母親が彼の取り分まで着服していると訴えていた¹⁸⁾。

狼男の目に母親がおそらく剥奪者として映ったのは、この出来事ばかりではない。ある女性にドイツ語を教えてもらえるかもしれないという話が出たことがあったが、母親は女性を家に入れたがらずこの話は破談になった¹⁹⁾。異性関係から完全に締め出されてしまったことに、思春期の狼男はがっかりして腹を立てたという。このようにして、母親は息子から「男性性やお金、自律性、もしかすると一般に他の対象を所有すること」を不可能にしてしまったのかもしない²⁰⁾。

しかしながら、狼男が母親を非難するとき、同時に彼はそのような非難は不当だと思っていたことは注目し値する。彼は自分に相続権があり、実際にそれが可能であると知っていながら、それがまるで母親のせいでは不可能であるかのように主張していたのだ。

（ii）小指が切れた幻覚

さて、狼男における象徴的父の問題を考える上で避けて通れないのが、「小指が切れた幻覚」のエピソードだろう。狼男が5歳の時に、狼の夢に登場する胡桃の木をポケットナイフで切りつけていたところ、自分の小指が切断されてかろうじて皮一枚でぶら下がっていることに気づいた。痛みはなかったがあまりの驚愕に助けを求めることもできず、しばらくしてからもう一度見たら、指に傷などついていなかった（GW12, 117-118）。5歳の狼男を言いやうのない不安に陥れたこの出来事について、フロイトはⅦ章——つまり、肛門域や腸の症状における母親との同一化に割かれた章——で記述しているが、ここでのフロイトの説明はやや入り組んでいる。

去勢の問題に対して私たちの患者が最初にとった態度はよく知られている。彼は去勢を排除し（*verwarf*）、肛門性交の立場に留まった。彼は去勢を排除したのだと私が述べた時、この表現のさしあたっての意味は、彼は去勢について抑圧の意味でも何も知りたくなかったということである。このことによって、本来は去勢の存在についていかなる判断も下されていなかったが、しかし、去勢は存在しないも同然であった。しかしながら、この態度は最終的なものではなく、幼児期神経症の時分にすらそうであった。後になると、彼が去勢を事実として認めていた十分な証拠が見つかる。彼は、この点においても、彼の性質を特徴づける方法で振る舞っており、そのせいで私たちは感情移入し叙述することが並外れて困難になる。彼は最初に反抗してそれから譲歩したが、一方の反応は他方の反応を揚棄したわけではなかった。最後には、彼にお

いて二つの対立する潮流が隣り合って存続し、そのうちの一方は去勢を嫌悪したが、他方は去勢を受け入れ、女性性をその代替物とすることです。すんでみずからを慰めようとした。(GW12, 117)

つまり、狼男は、去勢について知っていながら、去勢について何も知らないという二つの矛盾する態度を共存させていたというのである。実際、彼は姉とその女友達が外で放尿する場面を目撃して、女性器を女の子の「前側のお尻」であると自らを説得したことがあったという。これより前に、彼は自分の性器をいじったことでナーニャから「傷がつかますよ」という去勢の脅しを受けていた。その他にも、狼男の父が散歩中に蛇を杖で叩き潰したことなどから、彼は「去勢について考えること (Gedanke an die Kastration)」はあったが、しかし、それについていかなる「信 (Glaube)」も「不安 (Angst)」もなかった (GW12, 49)。このような「排除 (Verwerfung)」は「抑圧 (Verdrängung)」とは別物であるが、これらは一体どのように区別されうるだろう？

ラカンが「排除 (forclusion)」という名のもとでこの概念に特別に与えた地位を見てみよう。

さて、その行動においては明らかであるにもかかわらず、狼男は象徴的な機能の登録へと去勢を到達させることすべてを拒否しており、つまり、「私 (ジュ)」によるあらゆる去勢の引き受けは彼にとって不可能になっています。このことは、彼が子ども時代に短い幻覚を体験していたという事実とこの上なく密接な関係をもっています。その幻覚について、彼は非常に正確な詳細を報告しています。(S3, 21)

ラカンにおいて、狼男が去勢を「排除した (verwarf)」ことは、去勢の脅威が象徴界 [= 意味の領域] へと到達できなかったことへと翻案された。排除と区別される抑圧は、この意味の領域への登録ができているものを否定することである²¹⁾。反対に、象徴界に登録されなかったものは「現実

界における再出現」という異なる運命をたどることになるのだが、それが幻覚の形をとるのは、排除されたものは他の意味作用へと回付することができず、象徴的加工を施すことが不可能になってしまっているためである。私たちが自分の所有物でないものを勝手に処分することができないように、象徴界に登録されなかったものは幻視という制御不能な形で狼男を襲ったのである。

このような理解は、フロイトが「防衛—神経精神症」(1894) で想定していた発症メカニズムと照らし合わせることができる。この 1894 年のテクストの中で、フロイトはヒステリーと強迫神経症、および幻覚性錯乱における防衛のメカニズムについて論じている。ヒステリーと強迫神経症における防衛は、表象と結びついた情動に対して行われ、表象そのものは心的領域にとどまり続ける。対して、「自我がその耐えがたい表象をその情動ともども排除して (verwirft) しまい、自我はあたかもそのような表象が自我のなかに一度たりとも入り込んではいなかったかのように振舞う」ことがある (GW1, 72)。このようなより高度な防衛は、病理としてはより重篤な幻覚性錯乱を引き起こす。

ラカンは、シニフィアンとして一度受け入れられたもの [= 是認 (Bejahung)] を打ち消す過程が抑圧であり、是認に先立って何かが象徴界への登録に失敗することを「排除」と呼んだのである²²⁾。かくして、フロイトにおける心的生活への表象の出入は、ラカンにおける意味世界からの放逐／意味世界への参入へと読み替えられた。

ここで、小指が切れた幻覚についてのフロイトの説明をもう一度よく読んでみよう。フロイトは、むしろ狼男が去勢について確信していたことの証拠として幻覚を挙げているのである。ミレール (2009b) は、小指が切れた幻覚は、去勢の脅威の排除ではなく、むしろ去勢の現実性の確信によって起こったものであると述べている。狼男にとって、両親の性交の場面の目撃は、「その可能性については既に頭にあったが、去勢が本当にあることを確信させられた (die Überzeugung von der Wirklichkeit der Kastration)」経験であった (GW 12, 72, 強調引用者)。

議論が錯綜する前に、私たちは一つの結論を述べておこう。狼男は、おそらく、去勢（想像的父）についても父性（象徴的父）についても知っていたが、それを自分のものとして受け入れることを自ら拒否したのではないだろうか。小指が切れた幻覚を説明する「排除」の二重性は、狼男がおよそ「父性」なるものに対してとった態度の二重性と同系である。すなわち、フロイトが「排除」を心的生活からの完全な除外（1894年）と「（去勢について）知っているけど知りたくない」（1918年）へと分裂させたのと同様に、狼男は父の遺産（私たちはこれを既にエスペランスの掛詞によって父性へと読み替えた）を相続する可能性があり、去勢する父についても承認する父についても知っていながら、一方でそれに対する権利を主張しつつ、他方でそれを拒絶するという態度に自らを分裂させていたのである。

狼男の場合、彼が「父のような紳士に」なろうとしていたことから、象徴的な同一化の道は半分拓かれていたことになる。しかしながら、狼男の内的世界における父のイメージは、ヤヌスのように二つの顔をもっていた。狼男の父親は、立派な父親であると同時に、狼男がサナトリウムで目撃した、病気によって弱った父親でもあったのである。狼男は、結局のところ、「新しい父から古い父を護った」（GW12, 97）。かくして、去勢は女性における傷という想像的なもの（ここでの「想像的」とは、一般的な「空想」の意味ではなくラカン派の「想像界」としての意味、つまり他者との競争や奪取の関係を言う）にとどまり²³⁾、狼男は象徴的承認を欠いた主体として立ち現れざるを得なかったのである。

Ⅶ. 父なき後に

その『回想録』から、狼男は大戦下のウィーンをテレゼと支え合って生き抜き、彼女の自殺という人生最大の悲劇をも乗り越えて、天寿を全うした。「他人の世話にならなければ全然生きていけない状態」（GW12, 29）とされていた時とは似ても似つかない姿である。イヴの後日談は知られていないが、ラカンは分析の終結を「悪い未来

を予兆するものではない」と述べており、彼のその後の人生について私たちは少なからず希望をもつことができるのではないだろうか。

イヴの分析の終結は、彼自身の希望によって、ルボヴィッチとともに双方の合意した時期に決められた。イヴは仕事もするようになり、通常の社会生活へと復帰するように思われたが、その結末は少々奇妙なものである。彼は静脈瘤を切除する手術を受けており、この出来事を、彼のこれまでの人生においても、ルボヴィッチとの分析においても一度も象徴化されることのなかった去勢に準ずるものとして理解することも可能だろう（S4, 91）。しかしながら、問題は、「売春婦に使ってしまった」という理由で彼が最後の診察（consultation）に料金を支払わなかったということである。

この治療の恩恵のない周り道は、それ自体は、〔治療〕結果を保留にしたままにするものではない。淫蕩の代価（prix）として遠回しな手段で支払われた最後のセッションの謝金（des honoraires）は、そういったユーモアはおそらく悪意がないわけではないが、悪い未来を予兆するものではない。（E611, 強調引用者）²⁴⁾

また、「精神分析におけるパロールとランゲージュの機能と領野」（いわゆる「ローマ講演」）における狼男についての言及も見てみよう。

確かに、ここではある別の要素が混じっていて、そこからある現実性が分析へと介入する。それはつまり金銭の贈与（le don d'argent）であり、これを私たちは他の場所で象徴的な価値と取り引きするためにとっておくが、その効力については、原始的な交換を構成する贈与に対してパロールがもつ関係について私たちが言及したことの中に既に示されている。しかし、ここでは、金銭の贈与はフロイトの主導によって逆転しており、この症例に立ち戻ることへのフロイトの執拗さと同様に、この症例が未解決のまま残している問題に対する彼の未解決の主体化を認識することができ

る。そして、そのような事情が、精神病を始動させるある要素であったことは、その理由をうまく説明することができないにしても、疑いようのないことである。(E311, 強調引用者)

ラカンが症例「鼠男」で読み解いたように、主体の真理〔＝歴史における書き込み〕とは、父やその上の世代の罪という象徴的負債を引き受けることによって開示されるのであった。つまり、主体が自らの去勢について何らかの知を手にする時、彼は必ずその代価を払わなくてはならないのである²⁵⁾。しかしながら、狼男においては、募金活動に代表されるように、金銭の支払いがフロイトあるいは精神分析コミュニティ全体との間で逆転していた。狼男はフロイトに金銭を支払わせながら、自分は何一つ痛手を負うことなく去勢の問題を(何とか瀬戸際という時もあったけれども)回避してみせたのかもしれない。金銭の贈与は、狼男の肥大化したナルシズムにさらなる糧を与え、狼男を文字通りの「私、この最も有名な症例」へと至らしめた²⁶⁾。

VIII. お わ り に

本論では、狼男がフロイトとの分析後に呈した「心気症型のパラノイア」の症状について、姉や母親との同一化という観点から検討し、また、ラカンが取り上げたことで注目された狼男における去勢の脅威の「排除」について、狼男の父性への態度と概念そのものの二重性という再解釈を試みた。また、症例「イヴ」と比較しつつ、分析における去勢の引き受けの問題と金銭の支払いとの関係についても、患者たちの後日談と『エクリ』の意味深長な文体から一つの仮説を導き出した。

イヴの服への関心は、その後彼に同種の悲観的な妄想を引き起こすことはなかったのだろうか？ オプホルツァーがスケッチした狼男の晩年の姿は、はたして童話のしめくりにふさわしい牧歌的なものだったのだろうか？ これらの問いに対する答えはひとそれぞれだろう。フロイトいわく、精神分析が約束できるのは、境遇や運命が患者に与え

る苦痛を「ありきたりな不幸」へと変えること(GW1, 312)であり、ラカン理論が陰に陽に示すのは、精神分析的主体とは自らの欠如を引き受けた者に与えられる称号だということである。この意味で、精神分析は幸福論において極めて慎ましい立場を表明している。本論もまたその目的を幸福論に据えるのではなく、主体における去勢という問題に対して、要請される真理や知を求めず、あくまでも曖昧さの中にとどまるという例外的な道を選んだ者たちの顛末を提示したに過ぎないのである。とはいえ、彼らは、精神分析の倫理が私たちに課す義務と幸福の袋小路から、私たちにある種の解放と逃げ道を与えるかもしれないという仮説をもって本論のしめくりとしたい。

注

- 1) Gardiner (1973), p. 94.
- 2) フロイトの著作からの引用については、S. Fischer 版の『全集 (Gesammelte Werke)』における収録巻数と頁数を「GW」の記号の後に示す。また、ラカンの著作と講義録からの引用については、Seuil 版の『エクリ (Écrits)』における頁数を「E」の記号の後に、Seuil 版の『セミナー (Le Séminaire)』からの引用についてはその巻数と頁数を「S」の記号の後に示す。
- 3) 期限の設定について、フロイトは後に「終わりのある分析と終わりのない分析」でも言及している (GW16, 60-62)。
- 4) Abrahamson (1980); Burkley (1989)。ただし、エイブラハムソンは一定の留保付きでこの診断を認めている。
- 5) Freud (1955), p. 3.
- 6) 狼男の一番のお気に入りだったピョートル叔父さんは、元来陽気な素質だったが、コルサコフによってパラノイアと診断された。その後、田舎の領地に隠居し、ねずみに食われた状態の死体で見つかるという悲惨な運命をたどっている (Gardiner, 1973, pp. 27-28/p. 96)。
- 7) GW12, 38; Gardiner (1973), p. 39.
- 8) Gardiner (1973), pp. 40-42.
- 9) Obholzer (1980), pp. 110-111。二人の姉弟はこの相言葉をドイツ語から作った。原語は 'rote Nase' を反転させた 'esanetor' である。マホーニー (1984) も指摘しているように、アープラハムとトロークが発見した〈体内化〉された姉ティエルカ (Tierka) と深く結びついた音韻 tr/tor が、ここでも響いている。
- 10) より厳密に言えば、精神病としてのパラノイアにおいては、リビードの撤回による「世界没落体験」が投影のメカニズムに先立って生じている。つまり、投影はすでに外界の対象から引き

- 離されたりピードが自我拡大（ナルシズム）へと利用されるまでの過程であり，ここから「妄想形成は回復の試みである」という有名なテーゼが導かれる。
- 11) ルース・マック・ブランドウィックはシカゴのユダヤ系の家系に生まれ，主にウィーンとアメリカで活動した女性分析家である。狼男に分析を施していた当時のブランドウィックは，自らもフロイトとの間で教育分析を受けていた。若くして才気を見出された彼女は，狼男とどちらがフロイトの寵児たりうるかをめぐる競争関係に陥っていたのではないかと考えられている。
 - 12) Brunswick (1928b), p. 505.
 - 13) 「ファルスのない（＝欠如のある）母親という意味で，ラカンは‘aphallique’という語を用いている（S4, 91）。
 - 14) 「問題は完全にそれとわかる恐怖症対象であり，全く欠落していた父性的イマージュの見事に示された代替物です。つまり，ある時期から鎧を着た男のイマージュが出現し，「噴霧式殺虫剤（fly-tox）」のチューブという特に攻撃的を持っている，恐怖症の小さな対象である昆虫を殺そうとしていました。」（S4, 89）
 - 15) 同旨の批判が行われている論文「治療の指導とその能力の諸原則」において，末尾の文献一覧にラカンはルボヴィッチの名前を「R・L」と伏せて表記した。この対象関係の不注意な操作はブーヴェのスーパーヴィジョンによって先導されたものであり，むしろラカンは彼女の鋭さを評価していたからだろうか。ちなみに，ルボヴィッチは一時期ラカンの教育分析を受けていたそうである（Miller, 2013）。
 - 16) 語源学的な問題にはここでは立ち入らないが，フランス語の‘espérance’には「期待」とともに「（相続の見込みのある）遺産」という意味もある。
 - 17) Gardiner (1973), p. 22; Obholzer (1980), p. 102.
 - 18) GW12, 105; Brunswick (1928a), pp. 440-441.
 - 19) Obholzer (1980), pp. 115-116.
 - 20) Pélabon (2013a), p. 179.
 - 21) 「抑圧されたものは常にそこにあり，完全に語られた形で，症状や多くの他の現象の中で表現されます。」（S3, 21）
 - 22) 厳密に言えば，ラカンは「排除（forclusion）」という言葉をいくつかの意味で使用している。詳しくは松本（2018）の第二部第三章を参照。本論で用いた排除の概念は，松本の整理した「第一の排除」に該当する。
 - 23) この幻覚について，フロイトは『ある幼児期神経症の病歴より』よりも前に発表された「分析作業中の誤った再認（「すでに話した」）について」（1914）の中でも取り上げている。また，フロイトが狼男に幻覚についてその後再度語り直しを求めると，「木から血が流れる」という別の記憶との混乱があったという。この「出血」のイメージは母親の疾患とも関連づけられるかも

しれない（Pélabon, 2013a, p. 188）。

- 24) 『エクリ』では，「最後のセッション（la dernière séance）」とされているが，ルボヴィッチの原文の表現は「最後の診察（la dernière consultation）」である（Lebovici, 1956, p. 8）。彼女が「（分析の）セッション」には一貫して‘séance’という語を用いていることから，この最後の‘consultation’は外科手術の診察（おそらくは傷の縫合後の経過観察など）を指しているのではないかと思われる。これが事実であったならば，イヴが「静脈瘤の切除手術という象徴的な去勢に代価を支払わなかった」＝「去勢を自らの負債として引き受けなかった」という私たちの読み筋を補強するだろう。
- 25) 去勢（＝ファルスの欠如）が生じさせる象徴的な負債は，「それを持っている時〔＝男性〕には借方勘定，それを持っていない時〔＝女性〕には異議を申し立てられた債権」であり，したがって，男性は通常それに対して支払いや返済の義務を負っていることになる（E8852-853）。
- 26) Obholzer (1980), p. 235. また，金銭の贈与という問題に関しては以下も参照のこと。Lacan & Miller (2021), pp. 37-40.

文献表

- Abraham, N. & Torok, M. (1976). *Cryptonymie: le verbier de l'Homme aux loups*. Paris: Aubier Flammarion. 港道隆・森茂起・前田悠希・宮川貴美子訳『狼男の言語標本：埋葬語法と精神分析』，東京：法政大学出版局，2006年。
- Abrahamson, D. (1980). The Borderline Syndrome and Affective Disorders: A Comment on the Wolf-Man. *Schizophrenia Bulletin*, 6(4), 549-551.
- Blum, H., P. (1974). The borderline childhood of the wolf man. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 22(4), 721-742.
- Brunswick, R. M. (1928a). A Supplement to Freud's 'History of an Infantile Neurosis'. *International Journal of Psychoanalysis*, 9(4), 439-476.
- (1928b). Die Analyse eines Eifersuchtswahnes. *Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse*, 14(4), 458-507.
- Buckley P. (1989). Fifty years after Freud: Dora, the Rat Man, and the Wolf-Man. *The American journal of psychiatry*, 146(11), 1394-1403.
- Freud, S. (1894). Die Abwehr-Neuropsychosen: Versuch einer psychologischen Theorie der akquirierten Hysterie, vieler Phobien und Zwangsvorstellungen und gewisser halluzinatorischer Psychosen. In *Gesammelte Werke* (Vol. 1, pp. 57-74) Fischer Verlag. 渡邊俊之訳「防衛－神経精神症——後天性のヒステリー，多くの恐怖症および強迫表象，およびある種の幻覚性精神病について心理学的な理論を構築する試み」，『フロイト全集』第1巻所収，東京：岩波書店。
- (1895). Studien über Hysterie. In *Gesammelte*

- Werke* (Vol. 1, pp. 75-312) Fischer Verlag. 芝伸太郎訳「ヒステリー研究」, 『フロイト全集』第1巻所収.
- (1911). Psychoanalytische Bemerkungen über einen autobiographisch beschriebenen Fall von Paranoia (Dementia Paranoides). In *Gesammelte Werke* (Vol. 8, pp. 239-320) Fischer Verlag. 渡辺哲夫訳「自伝的に記述されたパラノイアの一症例に関する精神分析的考察 [シュレーパー]」, 『フロイト全集』第11巻所収.
- (1914). Über fausse reconnaissance («Déjà raconté») während der psychoanalytischen Arbeit. In *Gesammelte Werke* (Vol. 10, pp. 115-123) Fischer Verlag. 道筑泰三訳「分析作業中の誤った再認 (『すでに話した』) について」, 『フロイト全集』第13巻所収.
- (1915). Mitteilung eines der psychoanalytischen Theorie widersprechenden Falles von Paranoia In *Gesammelte Werke* (Vol. 10, pp. 233-246) Fischer Verlag. 伊藤正博訳「精神分析理論にそぐわないパラノイアの一例の報告」, 『フロイト全集』第14巻所収.
- (1918). Aus der Geschichte einer Infantilen Neurose. In *Gesammelte Werke* (Vol. 12, pp. 27-157) Fischer Verlag. 須藤訓任訳「ある幼児期神経症の病歴より [狼男]」, 『フロイト全集』第14巻所収.
- (1931). Über die weibliche Sexualität. In *Gesammelte Werke* (Vol. 14, pp. 517-542) Fischer Verlag. 高田珠樹訳「女性の性について」, 『フロイト全集』第20巻所収.
- (1937). Die endliche und die unendliche Analyse. In *Gesammelte Werke* (Vol. 16, pp. 57-99) Fischer Verlag. 渡邊俊之訳「終わりのある分析と終わりのない分析」, 『フロイト全集』第21巻所収.
- (1950). *Aus den Anfängen der Psychoanalyse, Briefe an Wilhelm Fließ, Abhandlungen und Notizen aus den Jahren 1887-1902*. London: Imago.
- (1955). *An infantile neurosis, and other works (The Standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud; v. 17. 1917-1919)*. Hogarth Press: Institute of Psycho-Analysis.
- Gardiner, M. (1973[c1971]). *The Wolf-Man and Sigmund Freud*. Harmondsworth: Penguin. 馬場謙一訳『狼男による狼男: フロイトの「最も有名な症例」による回想』, 東京: みすず書房, 2014年.
- Lacan, J. (1966). *Écrits*. Paris: Seuil.
- (1981). *Les psychoses. Le Séminaire Livre III (1955-1956)*. (J.-A. Miller, Ed.). Paris: Seuil. 小出浩之・鈴木國文・川津芳照・笠原嘉訳『精神病 (上・下)』, 東京: 岩波書店, 1987年.
- (1994). *La relation d'objet. Le Séminaire Livre IV (1956-1957)*. (J.-A. Miller, Ed.). Paris: Seuil. 小出浩之・鈴木國文・菅原誠一訳『対象関係 (上・下)』, 東京: 岩波書店, 2006年.
- (2013). *Le désir et son interpretation. Le Séminaire Livre VI (1958-1959)*. (J.-A. Miller, Ed.). Paris: Seuil.
- Lacan, J., & Miller, J. (2021). *Aux confins du séminaire: Sur l'homme aux loups, dissolution, caracas*. Navarin.
- Lebovici, R. (1956). Perversion sexuelle transitoire au cours d'un traitement psychanalytique, *Bulletin d'Activités de l'Association des Psychanalistes de Belgique*, 25, 1-7.
- Mahony, P. (1984). *Cries of the Wolf Man*. New York: International Universities Press.
- Miller, J.-A. (2009a). L'Homme aux loups. *La Cause Freudienne*, 72(2), 79-132.
- (2009b). L'Homme aux loups (suite et fin). *La Cause Freudienne*, 73(3), 64-117.
- (2013). "Les pères ont mangé des raisins verts, et les dents des enfants en ont été agacées", *La règle du jeu*, 19 mars.
URL: <https://laregledujeu.org/2013/03/19/12799/«-les-peres-ont-mange-des-raisins-verts-et-les-dents-des-enfants-en-ont-ete-agacees-»> (最終閲覧日: 2025年3月6日)
- Obholzer, K. (1980). *Gespräche mit dem Wolfsmann*. Hamburg: Rowohlt Verlag. 馬場謙一・高砂美樹訳『W氏との対話: フロイトの一患者の生涯』, 東京: みすず書房, 2001年.
- Pélabon, C. (2013a). Un regard pénétrant (Histoire de l'Homme aux loups). *Figures de la psychanalyse*, 25(1), 171-195.
- (2013b). Un regard pénétrant (Histoire de l'Homme aux loups). *Figures de la psychanalyse*, 26(2), 289-315.
- 松本卓也 (2018) 『人はみな妄想する —— ジャック・ラカンと鑑別診断の思想』, 東京: 青土社.

A Child is Being Devoured?: Freud's Case of the Wolf Man Revisited

Myu ISHIZAKI

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary Freud's case of the Wolf Man, one of the most famous patients in the history of psychoanalysis, was suffering from a bizarre fixed-idea on his nose and analysed by a female psychoanalyst named Ruth Mack Brunswick. At this time, he was diagnosed with 'the hypochondriacal type of paranoia', whose syndrome indicates a recognisable identification to his sister Anna and his mother. In this article, we summarise Freud's and Brunswick's theories of paranoia to discuss Wolf Man's hypochondriacal type of paranoia, and, with reference to Lacanian theory, attempt to re-interpret his childhood hallucination of cut finger in terms of the ambiguity of his attitude towards castration and paternity.

Keywords: The Wolf Man, Lacan, paranoia, identification, paternity